

提案授業における成果と課題

【はじめに】

英語科教育における今年度の大きな変動は、英語授業・学習における生成 AI の活用である。文部科学省の令和 6 年度補正予算による「AI の活用による英語教育強化事業」の応募が 2025 年 3 月に行われ、秋田県教育委員会および八峰町教育員会を含む 46 件が全国で採択され、今年度 AI を活用した実践的研究が教育現場で本格的に始動した。AI が自律的英語学習を進める道具として開拓されていく一方で、附属小学校の研究テーマ「自律した学習者が育つ授業デザイン」の下で追究された外国語科の授業は、人と人との出会いや、人が考え工夫する力を生かしたものであった。AI 活用推進の気運が高まる中で、人と人のふれ合いと人同士のコミュニケーションを学びの核に据えた山崎麻絵先生の授業は、AI 活用に大きく舵を切る前に、人が中心となる授業がもたらす意味と価値を再認識させてくれる機会となった。児童が授業で見せたコミュニケーション活動への没頭は、人の力を大切にしたい山崎麻絵先生の願いが開花していく様にも見えた。

【成果】

1. 「思い」に引き出される言語学習

英語の能力を培うことを目的として授業は展開されるのだが、「教師が目的達成に忠実になりすぎ、学習者を従えてしまっていないか」、この質問に対する答え、すなわち教師はどうすればよいのかという問いへの答えが示唆されている授業であった。資質・能力の 3 要素の知識・技能は、言語活動のプロセスにおいて児童自身が醸成していくものであり、教師が与えるものではない。児童は「留学生と友達になろう」という単元目標を、留学生は「子どもたちと友達になってください」という教師からのお願い（依頼）を、両者は到達し叶えるべく使命と感じ、言語活動に没頭していった。言語活動の最初は使命感が先行していたものの、徐々に言語を通して友達になっていく可能性と欲求を自覚し始め、子どもたち同士で助け合い、用意したお助けツールを駆使しながら、友達になるプロセスの楽しさに誘われるかのように、自発的に協力しながら英語を使っていた。最後には活動が終わるのを惜しんでいた。「思い」によって引き出された学びは、英語の知識・技能という用語に集約してしまうのは、もったいないような気がした。

思考力・表現力・判断力が、5 年生という発達段階に相応しい形で発揮されるような仕掛けが、言語活動のデザインの中に練り込まれていた。例えば、冒頭の復習と warm-up を兼ねた惹きつける視聴覚教材としてのクイズ、フラットな関係を醸す机のない膝を突き合わせる円形型のグループ、必要な情報から聞きたい情報へと難易度を上げられる設えのメモシート、留学生の質問・受け答え・メモ取りが模範となる自然なやり取りの構成、グループの良い学びをレポートする形での教師の中間指導（評価者ではなく学習者の一員のように）、友達になった満足感の確認の瞬間を英語の発表で締めくくするなど、随所に仕掛けられていた。

2. 教材作成力の成す事前デザインと観察眼の成す事中デザイン

教師の得意分野は何か、どこで力を発揮するか、麻絵先生の授業では、事前の教材作成力と事中の観察眼に、秀でた力が発揮されていた。留学生とのやり取りを単元ゴールに据えた単元計画は過去にも多くの実践がなされ、教師それぞれの持ち味で様々に異なる授業となるのを見てきた。本授業では、事前に行われた準備段階、すなわち授業が始まった時点で恐らく 9 割方授業が成功する下地ができていたと確信する。授業中の麻絵先生はとても落ち着いており、まるで子どもたちが自由に学び合う姿を愛するような眼差しであり、余裕が感じられた。その余裕も手伝って、子どもの学びを観察する眼が更に緻密になっていたのではないかと思う。指導案作成段階など授業の構想中には、学習者の反応を予測して授業をデザインするものであるが、この学習者の反応予測は実に大切であることも、本授業は再認識させてくれた。具体的には、指導案の〈予想される子どもの反応〉として「話題から考えている」「英語表現から考えている」「伝え方から考えている」という 3 観点から予想がなされていた。その担任としての日頃からのしっかりとした観察に基づく予想が、授業中に即座に教師が支援を出せる状態を作っていたのではないだろうか。

指導案通りに事が進まなかった時、無理やりにでも計画通りに進めてしまうか、臨機応変に対応していつの間にか最終地点に辿り着くのか、授業の成否の分かれ目である。授業の一瞬一瞬のできごとへの麻絵先生の対応は、明るい機知と温かいフォローに満ち、児童が安心して試行錯誤できる場を保障していた。事前デザインの充実が教師自身に自信と余裕を与えた実例である。

【課題とまとめ】

今後 AI 活用が小学校英語教育でも進んでいく。人と人とのふれ合いとコミュニケーションを大事にしながら、効果的な AI 活用を組み入れていく課題が待っている。大らかで明るい授業デザインができる山崎麻絵先生の創意があれば、難しくはない課題であろう。